

氏名	サエ 三 枝 まり
学位の種類	博士（音楽学）
学位記番号	博音第167号
学位授与年月日	平成22年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉橋本國彦の「芸術的歌謡」概念と近代日本音楽の課題
論文等審査委員	
（論文審査主査）	東京芸術大学 准教授（音楽学部） 植村幸生
（副査）	〃 教授（〃） 塚原康子
（〃）	〃 〃（〃） 根木昭
（〃）	桐朋学園大学 教授（〃） 西原稔

（論文内容の要旨）

本論文は、昭和前期に活躍した橋本國彦（1904－1949）の追究した理念とその創作作品、とくに歌曲創作の全貌を明らかにした研究である。

橋本國彦は20世紀前半の日本の音楽界において、作曲家・演奏家・指揮者として多大な功績を残しただけでなく、東京音楽学校の教官として、門下生の芥川也寸志、黛敏郎、矢代秋雄、団伊玖磨、畑中良輔など戦後の作曲家にも多大な影響を与えた音楽家である。作品数は、自作外の編曲と草稿及び断片を除いて570曲を超え、中でも「歌謡」（声を用いた作品）は500曲以上に及ぶ。

本論文ではまず、これら全作品をデータベース化し、作曲年、拍子、調性、歌詞、出版・レコード情報など様々な情報を含めて作品番号をつけた。そして、この作品表を土台に、全3部構成で論述した。

第1部は、橋本國彦の生涯と創作活動全般について取り上げた。第1章では、橋本國彦研究における資料の状況について明らかにした。第2章では、橋本國彦の生涯を年代順に概略した。東京音楽学校入学から欧米留学期間を経て東京音楽学校を辞職するまで、彼がどのような音楽体験をもちながら創作活動に携わったのか、いかなる音楽活動を行っていたのかについて明らかにした。第3章では、橋本國彦の創作姿勢を理解するために、橋本國彦の芸術思想について考察した。第4章では、橋本の生涯と作品のスタイルから彼の創作期を5つの時代に分け、各創作期における作品のジャンル分布を示した。第5章では、収集整理した全作品について、ジャンルごとに概観した。ここでは特に歌曲以外の作品について、詳しく取り扱った。第6章では、歌曲以外の作品の時期別の様式の変遷について明らかにした。

第2部は、第3部の予備考察である。日本歌曲史の中における橋本國彦の歌曲創作の位置づけについて明らかにするために、近代日本における歌謡前史について論じた。すなわち、橋本國彦が書いている作品ジャンルの大まかな見取り図が示した。第1章では、「歌謡」概念の歴史を概観した。第2章での「唱歌」、「童謡」、「民謡」、戦時歌謡及び戦後歌謡を含む「国民歌」の各概念について論述した。

第3部は、第2部で論じた昭和前期の「歌謡」概念をもとに、全歌曲作品を取り上げて、国家主義的な思潮の昭和前期の社会を背景にした橋本國彦の歌曲創作について論じた。第1章では、橋本國彦が作曲した歌曲の種類を「唱歌」、「童謡」、「戦時歌謡」、「大衆歌謡」、「芸術歌曲」（新民謡・歌曲）の5ジャンルに分け、それぞれ橋本國彦がどのように関わったのかについて明らかにした。ここでは、全歌曲作品を「Ⅰ後期ドイツ・ロマン派の系譜に位置づけられる作品」、「Ⅱ日本の伝統的音階や民謡素材を生かしたもの」、「Ⅲシェーンベルクのシュプレヒシュティンメ風の朗誦法を用いた作品」、「Ⅳフランス近代音楽の手法を用いたもの」、「Ⅴ平易な手法による作品」、それぞれの混合型に分類し、それぞれがどういう特徴なのかを例示した。第2章では、この分類に基づいて、時期別の様式の変遷、各歌曲ジャンルに

おける作曲様式、詩人の傾向を明らかにし、橋本國彦の歌曲作品の傾向を浮き彫りにした。第3章では、歌詞と音楽の関係について考察し、橋本國彦が日本語をどのように取り扱ったのかを示した。第4章では、昭和歌謡史における橋本國彦の位置づけについて明らかにした。橋本に対する同時代の評価について記し、さらに同時代の他の作曲家との比較を行った。第5章では、橋本の創作が、戦後の音楽にどのように引き継がれていったのかについて、橋本の音楽の系譜を含めて検討した。

以上の考察から、本論文では、第1に橋本が西洋の新しい傾向や最先端の音楽を自らの創作に様々な形で取り入れたこと、第2に橋本がフランクを思わせる半音階的な和声法を好んで用いたこと、第3に日本の音階にまったく新しい和声様々を試みたこと、第4に橋本の歌曲は日本語の特質そのものをも考慮にいれられていること、第5に橋本は民衆を対象とした作品と、専門家がステージで歌う作品とで書法を使い分けていたこと、第6に教養市民としての「民衆」のための創作を課題としていたことを指摘した。その結果、橋本國彦は、伝統邦楽や民謡など日本の伝統的な音楽について再認識を提唱する一方で、前衛的な技法も取り入れ、民衆に新しい音楽文化を定着させようと努めた作曲家であったと評価するに至った。

(総合審査結果の要旨)

橋本國彦(1904-1949)は戦前・戦中を代表する邦人作曲家の一人であり、東京音楽学校教授として次世代の作曲家に強い影響を及ぼしたことも知られている。しかし「芸術」音楽と「大衆」音楽にまたがる活動歴とそれに伴う作風の多様性、戦時歌謡に象徴される時局追隨的な傾向、そして何よりも作品数の多さから、戦後の洋楽史研究においてその作品世界の全貌が明らかにされた事はなく、また作曲家の創作理念についても本格的に論じられることはなかった。本研究はそうした研究状況に対して、まず橋本の創作活動の全体像を把握すること、その上で彼の各種歌謡作品をジャンルごとに分析し彼の創作理念との関連を論じることを目的としている。総じて未開拓といえる橋本國彦研究の基礎的部分を担うこととなった本研究は、今後の日本洋楽史にとって必要な、意義ある企てであったと評価すべきであろう。

本論は大きく三部からなる。第一部は橋本の生涯と事績、第二部は明治以降の日本における「歌謡」の略史、第三部は橋本の歌謡作品の分析にあてられる。さらに巻末には付録として作品表が添えられる。この作品表は、現在知られる橋本の全作品(同表で執筆者が付した作品番号によれば580曲。他に編曲115曲、断片・未完等90曲)を網羅しており、可能な限り原資料にあたって調査された成果であって労作と呼んでよい。この作品表を通じて橋本國彦の基礎データを提示し、その創作の足跡を理解するための基盤を提供したことは学術的に意義深い達成である。

その一方で、本論の構成と内容に関しては、さまざまな角度からのアプローチを試みてはいるものの、上記の作品データを生かし切るような展開ができなかったことから、全体として不徹底な、あるいは散漫な論述になったことは否めない。特に、表題に挙げられた「芸術的歌謡」の理念が、橋本の言説からも、歌謡作品の分析からも、ともに十分に読み出されていない点は、表題と論述内容との整合性を欠くという意味で、本論文の問題点として指摘せざるを得ない。これはおそらく論文執筆の経過で当所の構想と内容とが徐々にずれていった結果であろう。また、橋本の日本的和声論とその実作への応用、歌謡創作に反映された都市的「民衆」概念など、有効な論点を見いだしながらそれらがほとんど論述に活用されず、未消化に終わった点も惜しまれるところである。

しかしながら、橋本國彦をはじめとする昭和戦前期の作曲家研究にとって、今後の研究の先鞭をつける資料研究上の成果を挙げたことは特筆すべき業績と判断される。よって、審査委員一同は学位論文審査に合格したものと認める。